

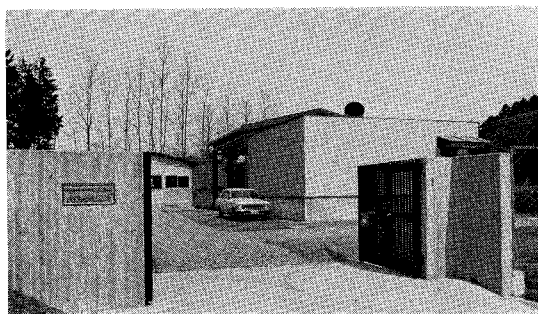
京大シュミット大宇陀観測所の誕生

今 川 文 彦*

福知山市に設置されていた京大宇宙物理学教室のシュミット望遠鏡は、いろいろな事情から他に移転せざるを得なくなり、移転地として奈良県宇陀郡大宇陀町守道が選ばれたことは、天文月報1976年9月号の拙文でも簡単に触れたが、このたび漸く新観測室が竣工し、3月25日現地で開所式が行われた。この機会に、観測所が設立されるまでの経過を述べるとともに、観測所の概要を紹介しよう。観測所は正式には、京都大学理学部宇宙物理学教室大宇陀観測所 (Ouda Station) と呼ぶ。

移転候補地の本格的調査を開始したのは一昨年6月である。当初は、既存の施設（飛驒天文台、上松観測室など）も含めて検討したが、教室員の利用のし易さの点から考えて、遠隔の地は一応除外した。調査は気象資料の収集から始めて、当然のことながら天候・人工光など観測プロパーの条件の検討をまず行った。その他に現実的な2つの条件を考慮する必要がある。第一は、観測所は大学附置研や学部附属施設ではないので、移転予算の制約が極めて厳しいこと。第二は、同じ理由で常駐の要員はないから、教室の研究者が随時、普通の交通機関を利用して2~3時間以内で到達できる時間帯に在ることである。従って候補地の選定には並々ならぬ困難があり、調査区域は京都・兵庫・滋賀・奈良・三重の五府県にまたがり、諸条件を比較検討した地点は19ヶ所に及んだ。この中から数ヶ所を選んで限界等級を決める観測も行って、考えられるあらゆる条件を比較総合評価した結果、大宇陀地区が最適であるとの結論に達し、初めて町当局に接触しその意を伝えたのが一昨年10月29日のことであった。（調査の詳しい資料は宇宙物理学教室技術報告 No. 1, 1976年7月参照）爾来、町当局ならびに地元住民の絶大な厚意と、大学事務当局の協力が実を結んで、昨年3月には土地の造成と買収が完了し、年度予算の令達を待って同年8月より工事の設計に着手し、始めの予定よりはかなり遅れて竣工の運びとなった次第である。

観測所は、奈良県桜井市の南東約12軒、国道166号線から僅かに入った所に在り、交通の便利なわりには人里離れた村落で、光公害を極度に嫌うシュミット望遠鏡の観測地として一応満足である。また、予算その他の事情から止むを得ずそうだったことではあるが、西から北西にかけて削りとった丘陵の陵線が、地平高度最大約15



度観測を遮ぎることになったが、これが大阪都市方面の光の衝立になったことも怪我の功名である。

観測室は、設計の段階でスライド・ルーフ式を止めてドーム式にしたいなど多くの希望が出されたが、新設ではなく移転であるという建前を崩すことはできなかった。それでもスライド・ルーフその他観測棟の改造、それに附属する研究棟の拡大、宿舍・ガレージの別棟建設などが認められ、福知山に比べて望遠鏡の操作や生活環境の点で、かなり改善されたものとなった。

望遠鏡は約一年間解体して倉庫に格納されていたので、その整備に案外手間取り、今やっと電気系・機械系の調整がほぼ終わったところで、これから光学系の調整に入る。準カセグレイン式用の高次非球面副鏡（これも技術報告参照）の研磨も大体仕上がっているのので、このテストも行わねばならない。カセグレイン焦点に装着する光電測光装置も間もなく完成する。福知山での経験を生かして、乾板ホルダーおよびその調節機構の改良も考えている。再びこの望遠鏡が活動するまでには、なお若干の時間が必要であろう。遅くともこの小文が印刷される頃には、それを期待したいものである。

最後に、この大宇陀の地は、柿本人麿の有名な万葉の歌“ひむがしの野にかぎろひの立つ見えて、かへり見すれば月かたぶきぬ”が詠まれた所で、この歌の中の“月”および“かぎろひ”の天文学的・物理学的考証を、昭和15年、当時の東京天文台技師辻光之助先生と、東大物理学教室小穴研究室の村上敏男氏（現ナルミ商会社長）に依頼したことがあるという。（この点については、大宇陀町教育長増岡氏の別文の紹介がある）まんざら、天文観測に無縁の土地ではなかったということは後で知った話である。

* 京大理 F. Imagawa: Ouda Station of the Kyoto University.